

高校生のことばと国語学力

職業高校の現場から

叶岡淑子

はじめに

不勉強に過ぎた教職生活のなかで、「ことばとは」、「学力とは」、「国語教育とは」、「学校とは」といったことを今ほど考えさせられるときはない。それは「教育改革」が叫ばれているからではなく、目前にいる生徒たちの使うことばのゆがみ、国語力の貧しさ、その背後にある生活のくずれ、人格形成の遅れなどが年ごとにあらわとなり、いま国語教育は何をすべきかに思い悩むからである。

「最底辺」といわれる郡部の職業高校に来て二年余、いまだに試験で書き下ろす文書を読むと、必ずしも「ことば」の問題が現れる。小・中・高・大をつうじ、幼・少・青年期全体にわたる発達の病理現象が進行しつつあるのではないか。大げさに言えば、人類が長い期間に築き上げてきた文化的価値のことばによる継承・創造が危機に陥りつつあるのではないか。そのことのひとつの中集中的表現としてこの生徒たちの姿があるのではないかのか。——そう考えたとき、現場の一員として黙つてはいられないし、未来の主権者たちの学力と人格形成への道を模索しないではいられない。せかれるような思いで表題のテーマをあえて自分に課した。先輩・同僚諸氏のご批判・ご教示を心からお願いしたい。

「最底辺」といわれる郡部の職業高校に来て二年余、いまだに試行錯誤の連続である。生徒たちの可能性をあるいは疑いあるいは信じ、教壇実践に追われる毎日のなかから、現時点での自分なりの問

私は、最近の子ども・青年のことばと学力をめぐる状況の深刻さは単に「底辺高校」だけの問題ではないよう思う。そこには幼・

一、ある職業高校の生徒たち

日本農業の現状を反映して、いま農業高校の苦悩は深く重い。俗に「普・商・工・農」といわれ、職業高校のなかでもそれは最下位

にランクされる。かつては有為の農業青年を輩出したこの学園も、

今では四月を迎えるたびに新入生の様がわりが著しい。知・徳・体すべての面で発達の遅れをみせる子どもたちが、街なかの中学校から選別されて送りこまれる。入学動機が「農業自営のため」という生徒は一〇%に満たず、もはや地域の農業高校とはいえない。およそ半数の生徒が高知市などから高い交通費を負担して通学する。しかも家庭崩壊がすすみ、授業料を払えない家庭もふえている。文化環境は一様に貧しい。

生活実態をアンケート結果でみよう。テレビ視聴時間三時間以上が七〇%，家庭学習時間三〇分以内（ゼロを含む）が同じく七〇%もいる。「学校生活で一番楽しいのは」の問いでは、授業五名に対し、休み時間と答えたのが六四%であった。彼らはよくしゃべり、よくはしゃぐ。高校とは彼らにとって、疎外してきた小・中学校でのプレッシャーからの“解放区”であり未成熟な仲間どうしの“社交場”であるかのようだ。いま少しきびしく現実を直視しよう。

基本的生活習慣のゆがみは悲しい。遅刻、忘れ物、授業中の私語、姿勢の悪さ、日常のふざけや奇声、乱暴な言葉づかい、廊下を歩き

ながらジユース類を飲む、パックや紙くずを所かまわらず捨てる、掃除はきらうなど、自立の遅れ、学習以前の問題が渦巻いている。

言動の幼児性、自己中心性、根気や体力のなさも著しい。「めん

どくさい」「しんどい」といつて動くことをきらい、床に落とした

プリントを「先生ひろって」と言う。甘え、スキンシップ願望（さ

びしさ）が強い。

読むのはマンガかコミック雑誌。新聞も番組欄のみ。図書館の貸出冊数は年間一人平均やつと二冊。感想文やあらすじさえ、およそ書くことをきらう。

語彙数調べを田川時彦氏の「連想語調査」にならって行った。「人間」という刺激語から連想する語を五〇秒間にできるだけ多く書かせるのであるが、一年生九三人の一人平均は四・九語であった。これは田川氏の調査結果の小学六年生の平均五・二語より低い。調査条件の違いはあるにしても随分と低い。

入学直後の漢字力診断テストでみると、漢字のつまずき時期は三歳四歳ごろと思われる生徒が多い。たとえば「駅」（学年配当別では小二）の書き取りの正答率は七二%であるが、「救」（同小五）は三八%であった。長い文章が読めない、作文が書けない、小説がわからないなどは更に深刻だ。

さて、右のような状況は職業高校でとくに顕著であるけれども、大なり小なり多くの高校が抱える課題であることは高知県教委による次の報告書の一<sup>(2)</sup>部からもうかがえる。

「……漢字について、力も弱く筆順もでたらめ、テストをしたたり指導法も工夫しているがなかなか定着しないことである。

その他、長文が苦手で興味関心をひく教材選びや教材づくりに苦労している。文法や作文力も弱く、ひらがなの形や筆順もでたらめである。学習用具の準備や学習態度をきちんとさせる等（の意見）

も出された。」  
またこの状況は全国的傾向らしく、全国の高等学校国語科指導主事の会合でもほぼ同様の悩みが出されるという。<sup>(3)</sup>

## 二、子ども・青年のことばの状況

「聞く」「読む」「書く」の四領域からとらえてみたい。

(1) 「話す」ことでは

単語会話がふえている。きのうも養護の先生からこんな話をきいた。——一人の生徒が保健室へかけこんできて、「校内暴力」という。「どうしたの?」と訊くと、「ガラス、ガタン、プシュ、これ。」

と言つて手を見せた。指先を少し切つていて

ガラスが割れたというのだが、まるで劇画のせりふそのままだと。多くの生徒がカタコトの一語文のような話し方をし、対話といふものが充分できない。一方で際限のないおしゃべり。これもよく聞いていると、断片語で一方通行的にしゃべっている例が多い。

流行語には敏感である。「カワイイ」「ナウイ」「ネクラ」はもう古く、「ネアマ」「ネシラ」「ネイジ」まである。「車っぽい」「青春ってる」など、コピー語の影響と思われるフィーリング造語も急増している。

擬声語・ギャグ言葉のほか、「クソツ」「バカタレ」「ウルセー」

「死ネ」などの衝動語・反撃語が男女ともに多用される。共感のことばより敵対のことばが多い。女ことば、男ことばの区別はほとんどなくなり、話すことばがモノセックス化しつつある。

音声の面では、カン高い独特のインントネーションが耳につく。发声の不正常な子（ひどい早口。この子の場合は書く文字も同様なタチの文字を書く）や幼児音の残る場合（「体育」を「タイク」など）もある。

気にかかるのは、何か注意された時など「わかりました」と言つてはわかつていないこと、また自分の非について「みんながしている」と言い逃れようとする傾向の強いことだ。内実のない口先だけのことばをいともざりげなく操る。ことばと心の乖離、ことばによる人間疎外がそこに起こっている。

(2) 「聞く」ことでは

他人の話を思考しながら聞く力が弱い。ひとつながらの説明を一度で聞きとれず、教師は同じことを何度も繰り返さなくては授業が進められない。聞きながらまとめてノートをとることは全く苦手で、板書を写すのがせいいっぱいである。また小説などを読んでやっても以前のように期待感がもり上がらない。

討論能力も低く、生徒総会やロングホームでおよそ討論といつもが成立しにくい。

ただし、友だちの作文や同世代高校生の手記などを読むときは集中してくる。オートバイや仲間の話題など、身近な生活には強い関

心を持っているのがわかる。

(3) 「読む」ことでは

朗読を指名されて起立しても顔は下を向いたまま低音でボソボソと読む。平仮名もすらすらとは読めず、漢字は一字の訓読みが特に弱い。例えば「朗らか」は二三%，「勧める」は一九%しか読めなかつた（新入生診断テスト）。教科書を読む力のないことがすべての教科学習の上の大きな障害になつてゐる。

読書によつて抽象思考や概念操作をする力がない。「勉強とは丸暗記なり」と信じ、自学自習の力が弱いのは最近の高校生の多くに共通する。本を読む生徒の場合も主觀的恣意的な読みとりをしてゐる例が多い。大学生の間で専門書が読まれず、「源氏物語」がマンガになり、「見栄講座」のような本がベストセラーになる状況の中で、中・高生の読書ばなれをどうくいとめるかは課題である。

(4) 「書く」ことでは

作文を非常にきらう。一・二行しか書けぬという。よく書く場合もワン・パターンの文章で、ホンネを表現できる力がついていない。ただ考えさせられるのは、自分たちのリレー日記のようなものを読むスタイルでどんどん書く生徒たちのいることだ。

漢字のあて字が多いのは、表意文字としての一字一字の意味を考えない、また知らないためである。手元にある一クラスの作文から拾うと、「特技—得技」「練習—連習」「自信—自心」「未知—道」といった工合。「授業—受業」「受験—授験」「勉強—勉教」など

は何やら考えさせられるし、「期待と不安—氣体とふわん」「学力の向上—学力の工場」となると痛烈な皮肉に思えてくる。

ひらがな表記も、「憎悪—ぞお」「成就—じょじゅ」「よかつたよかあつた」などある。「おわり—おはり」「がんばる—ぐわんばる」と旧仮名遣いが現れるのは、マンガの影響らしい。文の組み立ての上で、主述のよじれ・語句不照応などは枚挙にいとまがない。文字はいわゆるマンガ字が特に女生徒に多い。細いシャープペンシルや色うすい鉛筆を好み、古文・漢文でも横書きしたがる。

### ④ 三、その背景にあるもの

#### (1) 映像・ファッショニズム文化と受験体制

いまの高校生は、高度成長の生み出した歪みと病理の吹きだす社会のまゝただなかで育つた。商品経済とマスコミの発達、文化それ自体の商品化など、われわれの子ども時代とはあまりにも違う。かつての子どもは、身のまわりの大人们も子どもどうしの生きた人間関係のなかで、遊びや生活の実践を通して、いわば肉体的直接的にことばを獲得した。いまの子どもたちは、遊びや生活の経験をもたず、みずみずしい生活のことばを知らずに育つた。そして生活と関連のない、体験の裏づけのない商品化された「ことば」を、テレビや劇画を通して、いわば受動的間接的に受けとるしかなかつた。それは同時に子どもたちの、主体的に読み書き考える姿勢と能力の発達

を押しとどめる過程でもあつたといえる。その土台には、親たちの労働条件の悪化による生活の多忙化、家庭や地域における人々のふれあいの衰弱化があつた。

また、激化する受験体制の中での知識注入型教育は、ものごとを知り考え味わい伝える媒体としてのことば本来の価値を変質させた。

ことばは単なる技能となり、そこでは正解か否かだけが問われる。そのことが子ども・青年の正常なことばの発達をゆがめ、眞の学力からも遠ざけてしまう要因の一つとなつた。また教育内容の量的負担増が、ことばと学力の消化不良を招いたのも確かである。

#### (2) 大人の言語状況の反映

さきにも述べた親たちの生活の悪化は、子どもたちへの文化伝達の機会と機能を失わせた。社会の暖かい人間関係が崩され疎外的状況の広がるなかで、人間らしい優しさや思いやりの心と表現力を失っているのは大人自身である。そして子どもたちにかけることばといえば、「早くせよ!」「こら!」「いかん!」などの管理的な命令口調が多い。子どもたちはこれまでの生育歴のなかで、ことばで傷つくことはあっても、ことばの力で励まされたり感動したりする体験を持たなかつた。感動の体験とともにことばを獲得するという機会があまりにも乏しい。そこから内発的のことばを持ってなくなり、乱暴なことば、うわべだけのことばを巧みに操るしかないのだ。

#### (3) 伝統的日本人的思考様式との関係

複合的な要因がかくみあいつつ、日本人ないし日本語の特性に沿

って表れているのが今日の子ども・青年の言語状況だといわれる。

ここで日本人的思考様式とは、論理より情緒を重んずる、あらわれに議論することを好まず曖昧性をよしとする、論理的対立をすぐ感情的対立に直通させる、全体をとらえるより一点一瞬の価値にこだわる、といった古い型の精神構造のことである。

今の中学生たちは、ホンネでムキになつて議論するということがない。まじめな話を「暗い」といつていやがる風潮がある。それは、「深刻な議論をしたら友人にきらわれる」「せめてうわべだけでも当たりさわりない話で愉快につきあうのがいい」という価値感から来る。その内面には、「人間関係をこわしたくない」「人とのふれあいが欲しい」という要求の積極面もある。しかしその要求も果たされないままにいるケースが多いのだ。  
「みんながしている」と言い逃れをする心理も、実は大人社会の古い型の価値観だろう。現代ではそれが早くも幼・少年期から一般化しているのである。

コピーライターや劇画のことばは、省略が多く心情表現を重んずる日本語の特性がマイナスに拡大されたものといえる。ことばの内実や論理、文法などよりもファーリングの優先される時代が少なくともこの部分では始まっている。

流行語はやがて消え去るにしてもその後に何が残るのか? 本来の美しく正しい日本語の体系を、子ども・青年に意識的に伝え根づかせていく努力がいま求められている。

#### 四、ことばと学力の回復への視点

「高校の国語は教師の持ち味で勝負するもの」とか「古文は解釈と文法一点張り」「学生時代の文学知識を小出しにして」とかいう考え方には、もはや古い。少なくとも、小・中学校での基礎学力を欠いている生徒たちの教室では無力である。さりとて漢字ドリルばかりでは漢字の力さえつかないことも経験ずみである。

全教科学習の土台としてすべての高校生に保障すべき国語学力とは何か。国語の教科構造をどうとらえ、教科内容をどう展開するのか。思春期という年齢と生活経験に見合った学力回復の科学的なすじみちはどうあればよいのか。――現場の私たちは、国語という教科が科学としての発達論的指導体系を欠いていることを嘆くひとまもなく、ともかく自分たちの手さぐりの実践のなかから学力回復へのプログラムをみだしてゆくしかない。

(1) ことばの力

よく知られているように、人間の認識は外界の反映である。その場合の反映とは外界の単なる受動的反映ではなく、人間が対象に能動的に働きかけることを通して獲得される能動的反映である。対象への分析・比較・総合などの働きかけを通して、対象の多様な性質のなかから特定のものをいわば切りとつて反映するさいの“枠組み”、――そのいちばん大切なものが言語（ことば）である。

だから“枠組み”のことばがゆがんでいたり貧弱であると、対象

をゆがんでとらえたり対象の一部しかとらえられなかつたりする。もちろんこの枠組み自体も人間がきたえ作るものであつて、本来、学習とは、自分の中に正しい枠組みを豊かに形成するいとなみにはかならないといえよう。

ことばという枠組みを通じて獲得される「知」の働きは、感情・感動を誘発し、実践への意志を起動する。一般に、高く豊かな認識には高く豊かな感情や意志が対応し、低く貧しい認識には低く貧しい感情や意志が対応するという。

まさに人間が人間として発達する決定的な武器としての言語の意義を考えたとき、生徒たちの言語状況を“荒廃”現象として嘆くのみでよいものか。荒廃が現実なら、その現実のなかにこそそれを乗り越える可能性を見つけ、引き出す教師の実践が問われている。

##### (2) 低学力のなかにひそむエネルギー

未曾有ともいえる荒廃をみせながらも、生徒たちはしらけきつてはいない。遅れているといわれながらも、教室や廊下や校庭で互にしゃべりまくり、友だちの体にさわり組みつき押しあいへしあいでいる。

それらのエネルギーを発達の望ましい方向へ噴出させてやることこそ求められている。そのためには、一人の生徒のわずかな積極性も

見落とさず励まし、評価し、言語能力を育てていく努力、教師と生徒・生徒と生徒の人間的な対話の回復を授業内外ではかっていく地道な、息の長いとりくみがいま必要だと思う。この努力を教師が怠るとき、生徒たちの自閉症や登校拒否がはじまる。

### (3) 感動をゆさぶる授業

昨年、田宮虎彦「沖縄の手記から」を学んだときの一年生の教室は深い感動に包まれ、読後の感想文はどれも真実味にあふれていた。また短歌・俳句教材のあとで必ず実作をさせるが、そのさい前年度の生徒作品をプリントして紹介してやると実にいきいきして主体的に創る。生徒たちは決して感動する心を失つてはいないし、心から感動するとき自然とそれにふさわしいことばを見つけるのだと思う。

感動にたいする受容力を失っているのはむしろ教師の側である。

生徒にとって（同時に教師にとって）感動のあるもの、励ましのあるものを教材として精選し、それをもとにことばや文字に表出させる指導が大切だと思う。そのため具体的なプランとしていくつか私が提起したいのは、①生活の中の生きたことばである演劇や映画の鑑賞、その上での台本やシナリオを使っての学習、②古典や現代詩の朗読・群読・暗誦、そして自分たちの手づくり詩集や句集、③生活をありのままみつめる作文・日記・自分史のすすめ、それに対応する教師からの励ましのことば、④自学自習ノート——新聞コラムの視写や語句調べや感想文、読書記録、小説のイラスト化など自由に学習させ、時どき交換交流をはかる、⑤国語通信発行——こと

ば遊び・漢字クイズなども連載して文字に親しませ、また教師と生徒のふれあいの場とする、などの試みである。授業以前かも知れないが、生徒たちの現実から出発する国語学習は、今日そんなところから始まるように思う。

### (4) 生活と教育全体を視野に入れて

ことばの学習は国語教室だけで行われるものではない。全教科・全生活の場で、正しく美しい日本語が使われてほしい。言語発達が全教科学習の土台である以上、言語と教育・言語と人間形成といった総合的協同的テーマで学校ぐるみの研究や討論も必要なときだと思う。そのことは同時に、国語教育の独自の任務をより明確にしてくれるに違いない。

とりまく諸条件改善はいうまでもない。高校格差、学級定員、小・中教育での過大な学習量などの改善は、高校現場にとって切実な願いである。それらを放置しての“特色ある高校づくり”や研修強化では効果は薄い。まして「遺伝子決定論」や「環境決定論」、また最新流行のペシミズム人間観・言語観では、今日の高校教育にとっては教育の放棄を意味しよう。

### 五、手さぐりの実践から——入学期課題作文の試み

三月末、合格発表直後の登校日、緊張した面持ちの生徒たち全員

に、次の一二のテーマの中から一つをよく考えて選ぶこと、三枚の原稿用紙に誠実に書き上げ四月七日（入学式）に提出することを課題とした。

①私の一五年間　②九年間の勉強について　③私の中学生活から  
確立へ向かってスタートしてほしい、その契機を作つてやりたいと  
思つて今年度はじめてとりくんだものである。参考書を読み始めた

青年期（一四・五歳～二四・五歳ごろ）が人生の他の時期と質的に区別されるのは、この時期を通じ、社会生活を嘗むに欠くことのできない資質や能力を含む自己の原型をみずから作りあげていくからだといわれる。たとえしらけ、落ちこんだ中学生活であつたにしろ、どこかに新しい感覚を抱いているに違いないこの一二日間に、彼らが自分自身と対面し、自分が何であるか（何であつたか）を考え、描写すると生きをもつた方がいい。自信を失わされつづけてきた彼らにとって、それは今まで気づかなかつた新しい自分の発見、自分との対面であつてほしいし、その自分へのいとしさ、自分を大切にする心の発動の機会であつてほしい。そういう思いが私にはあつた。

そして入学式当日、一四クラスのうち二クラスが全員提出。あと二クラスも二・三日後には全部そろった。これまで入学後のどんな課題もこれほど早くそろうことはなかつただけに私はまず感動した。そして、一三五編の作品を一つ一つ読んでゆくうちに、一三五人の幼い、しかせいいっぱいの人生がオーバーラップして私をとらえた。それぞれが誠実に自分を見つめ、総括し、表現している。規定の枚数をほとんどこなし、誤字や表記上のミスも少ない。人生、最初の著作ともいえるこの課題に真剣に立ち向かった生徒たち。スローラーナーといわれるこの生徒たちも、内面の感情や感動があれば自然に噴出し、たどたどしくはあっても表現できるのだという事実は、私にとってまた新しい発見であつた。

そのほんの一端を紹介したい。(すべて原文のまま。傍点は筆者)

「私の一五年間」（このテーマを選択した生徒は全体の一・二%）  
**A（男）**……母が内職をもつていくときはよくかごにいれてつれて

いつでもらいました。そしておおかたかごの中でねていたそうで、ぼくは二才の時からほいくにかよいました。一番いやなことは、毎週金よう日にはふとんをもってかえらなければいけない日だったのです。ほかの子供たちは親がフトンをとりにきてくれるけど、ぼくの母は仕事がいそがしかったのでいつもこれませんで、した。だからぼくは一人でフトンをもってかえりました。……ぼくが小学校へ入った年、一番かわいがつてくれたおじいさんがし

にました。とてもショックでした。そして中学3年の時父がしに

ました。……

「私の中学生活から」（同、一五・八%）  
「私の中学生活から」（同、二・四%）

B（男）自分という人間は頭が悪くてのろま。勉強がすきでない。

授業中に寝たりとなりの人と話をしたりして……一学期の出席日数の三分の二ぐらいがチコクだつたし……人の勉強の邪魔したりしていたのでクラスのお荷物といつてもおかしくなかつた。……今ふりかえつてくるやむことばかりだ。……

C（男）……英語なんか一年の終わりまで筆記体が一つも書けなかつた。でもクラスの主任の先生にはうかご残つてとくんされて筆記体の小文字はなんとか書けるようになつた。でも今だに大文字は大半分からない。……

「高校入試を体験して」（同、二七・一%）

D（女）……（テストを）やつているあいだすぐつらく、ただ1人でと言うことが自分にとっては一人でたたかいなさいといわれていてるようであった。だれもが一問一問きらんとといっている。私その中の1人、と思うと、同じようにやってみよう、もうそれしかないとと思うと、できるだけのことはできた気がする。……これからのことにもうまくぐりぬけていける気がする。……こ

E（男）……つくづく思ったのは勉強はキソが大切だということです。高校へ入つたら一年からきちんとやりたい。登校日に教科書などをもらった時「よしやるぞ！」という気持ちがわいてきた。

……人生最初の闇門だったといえる。……

「私にとって高校とは」（同、二・三%）

F（男）僕の家ではイチゴを作っています。作っているといつてもほんの少ししか作つていません。三日に一回取れるくらいです。

僕は手が聞いてるときは手伝っています。イチゴを取るのはとても腰が痛くてたまりません。父や母は痛くとも痛いとも言わずも最後まで取ります、僕は……「痛い、痛い」と言いながらなんとか最後まで取ります。僕が手伝った時には昼までかかるかかからないぐらいに終ります。昼からはイチゴをつめ……。中央市場へ持つて行きますが、五十箱か六十箱しかありません。苦しい思いをして取つても少しだけのガックリ来ます。……僕の家のイチゴは小さくてあまりよくありません。最高値をしているイチゴでもあまりいい値はしていません。僕はこんな父や母を見ていてこの学校に入つて施設園芸の方をしつかり学んで親にもっとやらやすく、やがては僕が家をやつて行こうと思っています。……だから僕にとって高校とは一つの楽しい時間であつて将来大人になつた時にイチゴを作つたりしていくための大変な基礎だと思います。……

「将来の希望」（同、一二%）

G（女）……身体障害者や親のいない子供たちのいる所へひつて働きたいと思っています。なぜかというと、私には手・足・目・口……いろいろ自分で使えるけど、不自由な人は……その支える人

になりたい。手話も習って……。また私には両親がいるのに、親のいない子は楽しく遊んでもらいたいのにできないので、私が……

…。

次は生徒たち自身のこの作文を書いた感想例である。（入学後のアンケートによる）

④いろいろあったなあと自分で驚いた。⑤九年間の勉強の区切りがついた。⑥書いてみて自分の気持ちがわかった。⑦これから目標がはっきりした。⑧私も負けではならないと思った。⑨悩みが解決してゆくような気がする。⑩自分が先生にわかつてもうらえる。⑪もっとわかるように書きたかった。⑫しんどかったが書き終わってすっとした。

私たちは四月、一五歳の春のかえりのほどの思いを受け取り、そして今この生徒たちとの日々は始まっている。その実践をこそ報告しなくてはと思うが、もはや紙数はすっかりオーバーしてしまった。そのためかこの文は短くなってしまった。さうして、筆の墨の匂いが残る。人の頭脳で運営する言葉の匂いが残る。おわりに

年に、ユネスコの「文盲」定義、すなわち「他人から口頭で説明されれば理解できるが自分では日常生活に関する手短な説明文を読んだり書いたりできない」に該当する「事実上の文盲者」が二千三百万人にのぼると発表されたそうだ。

また、本年五月七日から九日まで東京で開催された国際シンポジウム「日仏文化サミット」において、フランスの社会学者エドガ・モラン氏が現代文明に対する次のような警吉的発言をしたことが伝えられている。

科学的文化が発達し各学問の専門化が進むほどに、人間の基本的問題に関する深い考察が後退した。コンピューターは人工頭脳の役割をするが、逆に個人の思考を圧殺し、新しいタイプの無知が支配するようになつた。<sup>(5)</sup>

発達した資本主義国における文盲の問題は国際的な論議を呼んでおり、いま人類史的課題ともいえる。日本での一般的な状況は、一職業高校の現場ほどではないかも知れない。だが、いわゆる一流大学生の最近のいくつかの言動をみても、「受験対応力」という学力のもうさを感じるのは私だけだろうか。

とりわけ言語能力の遅れは、昨秋発表された先進国の子どもの学力比較調査結果でも指摘された。日本の子どもは数学の学力は抜群だが、国語・地理・世界史においてかなり劣っていたという。今後さらに、日本語ワードプロセッサーの普及のなかで、日本語の国民的リテラシーや日本文化の将来は一体どうなるのか。はじめに書い

